

Hop Step Jump

14

初任者研修第 14 回

授業づくり⑦

アンケートの感想から

今回は豊中市教育センターの ICT 機器を活用して「情報教育、ICT を活用した授業づくりについて」でした。教材作りと教育の情報化概論の 2 部構成で行いました。豊中市教育センター主査、岡本晃治先生による教育の情報化概論の部では、一人ひとりがタブレット PC を使いながらの講義でした。

タブレットを子どもたちみんなが使える環境が整うと、今の苦勞（ホワイトボードやペンを用意したり、大型 TV に iPad で撮った子どものノートを映したり）から解放されて、ちがう教材研究に力がまわせそうです。子どもたちもそれぞれの考え方を見やすくなって、とてもいいなと思いました。

コンピュータ支援員さんには、パワーポイントによる教材作りを指導いただきました。

フラッシュ教材を実際に作りながらの実習が大変勉強になりました。また、他の方の作った教材を見ることができるのは貴重な体験でした。今後は積極的に活用していきたいと思います。

何事もはじめは時間がかかりますが、その敷居さえこえることができれば、ワープロを使う感覚で、「子どもたちがどんな反応をするかなと想像しながら」教材が作れるのではないかと思います。まずは授業で子どもたちの興味・関心を引き付けるにはもってこいの道具です。しかし、そこで留まっていたではもったいない。例えば、暗記しなければならない課題があるとき「ハイ、ここまで覚えてくること。××にテストをします。」で済ませていませんか。フラッシュ教材を毎日少しずつ活用すれば、覚えるための時間を授業で保障できます。テスト後に居残り勉強を強制するより、はるかに学習効果が上がるのではないのでしょうか。

実際に教材を作ってみて、まだまだできることがたくさんあると感じました。クラスにいる、手の不器用な子や、視覚的に字を捉えることが困難な児童にも支援できる手立てがあることを知れました。

視覚支援の効果は、言わずもがな。より手軽にユニバーサルな授業環境が作れるのではないのでしょうか。支援が必要な子どもたちにとっても強力な学習ツールになりえます。実物投影機が使えるだけでも効果は絶大です。でも、一方で次のような考え方もあります。

教科的に、写真や絵を用いたい時に、スクリーンを使っています。様々な知識がないためにイメージしにくい子どもたちに対して、イメージを提示できることは、とても便利に感じます。ですが、ICT 教育そのものに疑問も感じます。大学時代、ICT 教育の展望について、かなり詳細に調べ、様々な文献を読み、フィールドワークもし、様々な現場を見ました。ですが、“イメージの提示”以外に“ICT にしかできないこと”は見つけられませんでした。使えたらそれに越したことはないですし、便利なのは確かです。国がここまで予算を組んで、お金をかけている意味は私には理解できません。他に、もっと予算をさくべき所はあると思うし、盲目的に ICT 教育＝正解とするのは間違っていると思います。電子教科書の企業にしても、電子黒板にしても、結局は、特定の企業の売り上げに貢献しているようにしか思えません。“イメージの提示”以外に ICT 教育にしかできないことは何でしょうか。情報の共有とかは、なくてもやろうと思えばできるので、多額のお金をかけてまで行う、その意義からまず教えて頂きたいです。

では、我々自身は ICT 技術をどのように活用しているのでしょうか。情報をやり取りし、処理し、思考し、表現するための道具として使っています。教え込み型の授業だけなら“イメージの提示”のみで済むかもしれませんが、これからの授業ではどうでしょうか。さらに ICT 機器の特殊性は、その汎用性にあり、好む好まざるにかかわらず様々な姿で生活に入り込んできています。21 世紀を生きる子どもたちに、メディアリテラシーを育み、デジタルディバイドによる不利益を生じさせないようにすることは公教育の役割ではないのでしょうか。

ICT を使うと便利なことがたくさんあります。一番こわいのは情報の漏えいだと思っているので、その部分を伝えて頂いたのはよかったです。ICT に頼りすぎない授業力をつけたいです。

ICT は諸刃の剣。使い手の倫理が問われています。